

農民は、主体的選択を求めている

いで やま ひろ し
出 山 裕 司

農協をはじめ生協や会社でも、経済的基盤を強化して組織の存続と発展に結びつきたいということで、その手段として合併が進められている。組織を大きくする政策が推進され、政策にあった対応をするということで多額の補助金がついてくる。

千葉県の酪農協についても、20数年前から、集送乳経費を軽減して、その分生産者の実質手取り乳価（所得）を多くするという名目で合併の必要性が提起されて何回となく会議で議論され、いつでも、決まったように総論賛成、各論反対で具体化は進まなかった。ところが、背景は違っていても、ポツリポツリと合併した組織ができるようになってきた。特に千葉県としては、新しい5ヶ年計画の中でも酪農協を一つにするという方針が出されている。この秋には千葉県房総地区の8酪農協のうち5酪農協が一つになるという方向で準備が進んでいるという話もある。ほぼ間違いなく具体化するものと思われる。

千葉は、昔から乳業メーカーとのつながりの強い酪農協が多く、今でも、何やかやとつながりをもちつつ、一元集荷多元販売の名のもとに県酪連に販売委託をしているという事情もあって、酪農協の合併は難しかったようである。どうにか実現の運びとなった裏には、酪農家の減少と高齢化による将来不安などがあり、消極的な対応であって守りの合併でもある。そこには未来に対しての展望もなく、主体的に酪農を存続発展させるエネルギーはなくなっていると思わざるを得ない。

そんなときに、私どもが、牛乳の処理販売事業を行っている酪農協、通称『農協プラント』、年商60億円で組合員80人の組合を、千葉北部酪農農業協同組合から分かれて新しく作ったことは社会的な流れに抗した、ゲリラ

的行為とみられても仕方ないと思っていた。3年前まではプラント経営と農協運営の将来展望（北酪21世紀構想）にそった、新工場建設と他農協との合併を進めてきた私は、景気の低迷時に新工場は危険、合併は相手に得させることでダメという多くの組合員の認識の下、組合運営を離れた。そして、組合員22名で新しい組織として、農事組合法人真栄酪農会を作り組合員酪農家が安心して牛飼いが出来るようにするために、ハッキリとした目標をもって活動を開始した。事業計画は三本柱である。その一つは牛乳、乳製品製造により牛乳に付加価値を見つけないというミニプラントへの技術指導。二つ目は牛乳、乳製品をはじめ地場の農畜産物の直売事業、三つ目はブランド製品を作り販売する事である。

このような組織を作り方針をハッキリ世間に打ち出した事で、千葉県内の酪農仲間からは大型合併や既存農協に弓を引く反乱者というように良い意味で期待をよせられているようだ。いま、苦しくとも、将来に対する『夢』があれば何とかなる。何時も実現可能な方針を持って主体的に行動する姿勢こそが活性化のみちであると感じているところである。昨年の10月に私どもが独立したことが酪農情報誌に乗ったところ、全国各地の酪農民や酪農団体から問い合わせや来訪者があった事からして、来世紀への生き残りの道は主体的行動以外にはないということであろう。

（千葉県千葉市・農業）